

技術者からの視点

●第50回●

ニュートンとガリヴァー

藍野大学非常勤講師 木下 親郎

同時代を生きた ニュートンとスウィフト

ニュートンとガリヴァーは、日本の子どもたちもよく知っている外国人である。

サー・アイザック・ニュートンは、1643年に生まれた。当時の英国は、旧暦（ユリウス暦）を使っていた、ユリウス暦ではガリレオ没年の1642年と同じ生まれ年となるため、ガリレオの生まれ変わりといわれることがある。

ニュートンは、1703年に英国の「王立協会（The Royal Society。1660年に設立された、現存する最古の科学学会）」の会長になり、英国の科学界に君臨する一方で、1699年には造幣局長官という官職にもついている。堅物として有名なニュートンの性格が、見込まれたのであろう。

一方、『ガリヴァー旅行記』の著者ジョナサン・スウィフトは、1667年に英国国王が統治するアイルランドで生まれた。英国国教会での栄達を望んでいたが、女王アン（1707〜14年にアイルランドも統治）に疎まれるところがあり、アイルランド聖パトリック教会の首席司祭という、彼にとっては不本意な職しか得られなかった。

この2人は20歳以上違うが、歴史に残る大きな接点がある。
スウィフトは風刺文学の第一人者である。

夏目漱石は『文学評論』のなかで、「下手な小説や詩などを幾十冊積んだところで到底『ガリヴァー旅行記』に及ぶものではない」と絶賛している。

スウィフトの最初の散文作品は、1696年発表の『桶物語』で、当時、キリスト教3教派の「カトリック」、「英国国教」、「ピューリタン」が張り合っていた姿を、3人の兄弟に見立てた物語である。

ニュートンと英国政府に勝った 英雄スウィフト

このスウィフトのもとに、ニュートンが不意に飛び込んでしまった。ニュートンが造幣局長官だったころの話である。

そのころ、英国の貨幣は造幣局がつくっていたが、アイルランドの貨幣については、英国政府が業者に製造を委託していた。

ある年、ウッドという商人が、贈賄により、アイルランドの銅銭を製造する国王認許を得た。ウッドが悪貨を製造し、アイルランドにばらまいたことを知ったスウィフトは、「ドレイピア」という匿名で「アイルランド在住の皆さんに」という公開書簡（ドレイピア書簡）を発表、ウッドの悪事を糾弾した。

英国政府は、ウッド銅貨の鑑定を造幣局長官であるニュートンに命じ、ニュートンは、ウッドの銅銭を、英国国内で流通している銅貨と変わらない品質を持つと判定した。

この鑑定にスウィフトは怒り、ニュートンをはじめ、関係者を名指して批判する「ドレイピア書簡」の続編を、次々と発表した。厳しい政府批判となったため、英国政府は報奨金を出し、匿名著者の告発を求めた。

アイルランドでは、首席司祭のスウィフトが著者であることは公知であったのに、告発者は出なかった。結局、ウツドの認可はとり消され、ウツドは破産した。スウィフトはアイルランドの英雄となった。

『ガリヴァー旅行記』で風刺される英国

当時、スウィフトが執筆していた『ガリヴァー旅行記』のなかでは、ニュートンと、ニュートンが会長を務める王立協会が強烈に風刺されている。

『ガリヴァー旅行記』は、英国文学を代表する作品であるが、多くの人は子どものときに、第一篇「リリパット（小人国）」、第二篇「プロブティンナグ（大人国）」を読んだところで卒業してしまう。しかし、子どもには難解な、第三篇「ラピュータ、バルニバービ、ラグナグ、グラブダドリッブおよび日本」、第四篇「フイヌム（馬とヤフーの国）」を含め、全篇が辛辣な風刺で、出版から300年たった現在でも、内容の多くは生きている。

ニュートンとのかかわりは第三篇である。バルニバービ国は、聡明な学者国王が統治

しており、何ごとにも慎重な検討が求められるお国柄だ。

学者は研究に没頭し、議員たちは果てしない議論に時間を費やし、新しい計画を策定し、実行に移されることはない。それでいて、従来の施設は悪いとして、代替案もいままと壊されるので、国土は荒れ果てている。

ガリヴァーが語る多くの事例の、ほんの少しを紹介しよう。

ガリヴァーは衣服をつくってもらった。仕立て屋は精密測定器で採寸を行い、詳しい図面を作成した。6日たつてできあがった品は「その仕立てのまずいこと、てんで恰好をなしていない。なんでも計算のとき数字を間違えたのだそうである」（中野好夫訳）というほどのものだった。

これは、ニュートンの著書が、印刷の誤りでひと桁間違っていたことを皮肉ったもの。また、アカデミーには500を超す部屋があり、各部屋では、開発者が研究に没頭している。太陽熱をきゅうりのなかに閉じ込め、必要なときにとり出す研究を8年間続けている研究者。アカデミー最古参の研究者は、人間の排泄物をもとの食物に還す研究をしている。もみがらを畑に蒔いて、穀物を収穫しようという研究もある。そしてここでは、他人の研究内容を批評しないのが不文律である。アカデミーは政治問題の研究も行っており、国民大会議の各議員たちは、投票のとき

には自己の意見と正反対側に一票を投ずべしとの提案を行った。それが、いちばんよい結果を得るからだという。

時代さえ笑う

国民は、天体に変動が起らないか、たえず不安におののき、夜も安眠できない。

「不安の原因と云うのがまた、他の人間なら誰もほとんど歯牙にもかけないようなことばかりなのだ」（中野好夫訳）

地球が太陽に吸い込まれるのではないか、太陽の光が消耗してなくなってしまうのではないか、近く現れる彗星の尾に地球が包まれて焼き尽くされるのではないかなどと心配している。彗星の話は、王立協会のハレーが「1682年にヨーロッパの人々を驚かせた彗星（ハレー彗星）は76年ごとに回帰する」と、発表したことをとり入れたものである。

スウィフトは、ガリヴァーに「これは英国のことをいっているのではない」と断らせているが、残念ながら、私たちはスウィフトの警句を笑い飛ばすわけにはいかないようだ。なお、スウィフトは、ガリヴァーを魔法つかいの島に立ち寄せ、魔法で甦らせたデカルトにこうもいわせている。

「今もてはやされているニュートンの万有引力説も、時代とともにやらなくなる」これはいまのところ当たっていない。